＜今日の説教のポイント ルカによる福音書６章1～11節＞

このお方の下に生きる時に、真の安息が与えられる！

１ 勝手に人の畑に入って取って食べていいのか？　問題は別のこと。

今日の箇所の前半を読むと、表題のような疑問を覚えるかもしれません。しかしイスラエルでは、必要な時は人の畑に入って取って食べてもいいとされていました（申命記 23:25-26）。困っている人への配慮です。ここでの問題は、弟子たちがしたことをファリサイ人が、「安息日は神様を思うことにあてるべきなのに、労働をした：**摘み、揉んで**(1)」と非難している点です。イエス様はどう答えられたのでしょう？

２ イエス様は身勝手？　否、ダビデもした！　大事なことは何？

イエス様は、かつてダビデがサウル王から逃げていた時に聖別されたパンを食べたことを指摘されました（サムエル記上 21:7）。この時ダビデは「嘘」もついたので(21:3)もっと罪深い行為だと非難できそうですが、ファリサイ人はしませんでした。信仰の鏡ダビデの行為だったからです。そして主は言われました、**「人の子(ご自身のこと)は安息日の主である」**(5)、と。人の安息を奪う安息日厳守は神様の喜ばれることではないのです。しかし、真の安息とは何かを考えなければなりません。

３ 癒された人はすでにイエス様の教えに聞き入っていた！

後半の話を読むと、「右手が萎えた人は癒されてよかったな。でも私にはそんなこと起こらない」といったことを考えがちです。確かにイエス様も、この癒しを**「善を行うこと、命を救うこと」**(9)の例として挙げられています。しかし、この人が癒される前からイエス様の教えに聞き入っていた点に注目です(6)！　聖書を読んで行くうちに分かって来ることは、救いとは、今直面している問題が解決したり、この世的に幸福と思われている内容を手に入れることではない、ということです。そうではなく、どんな病でも癒すことのできるお方を送って下さった全能の神様がおられることを知るということ、その方を信じその方と共に生きて行けば心配ないのだということ、そのことを知ることが聖書から教えられる救いなのです。右手の萎えた人はこの方に向き、この方に聞いて生き始めていたのです。右手は癒されました。しかし、癒されなくても、主の平安の中を歩み出していたのです。真の安息はここにあるのです！